

大橋：それでは、2つ目の報告に移らせていただきます。太田淳広島大学大学院文学研究科准教授から「貿易、戦争、移民 18-19世紀マレー海域の海賊」と題してご報告をいただきます。太田先生は近世・近代東南アジア史、とりわけ18-19世紀島嶼部東南アジアにおける貿易、移民、海賊をご研究のテーマにしておられます。ご共著で『海域アジア史入門』、第4回日本東南アジア史学会賞を受賞されたご著書で『Changes of Regime and Social Dynamics in West Java』をお持ちです。どうぞよろしくお願ひ致します。

太田：どうもご紹介ありがとうございます。皆さんはじめまして、広島大学の太田と申します。このプロジェクトに歴史班ということで呼んでいただきまして、どういうふうに自分がこのプロジェクトに貢献できるのかと、今日来るまで迷っていたのですが、これまでのお話を聞いて、特に上田先生のお話を聞いて、大分イメージがクリアにもなりました。私がこれから報告する内容も、一応このプロジェクトの筋に合っているのではないかとということが確認できたように思います。

はじめに

このプロジェクトになぜ私がこのテーマ、海賊の話を持ち出すのかといったところからお話しさせていただきたいと思います。このプロジェクトのきっかけになる外邦図ですが、ただいま皆さんもご覧になったように海岸線が非常に詳しく書き込まれていまして、こういったものを私は海図と言ってみたいと思います。これに対して、もちろん地面の情報を詳しく書き込んだものが地図です。では、海図というものがいつごろから作られるようになったか。この海図というものを私は、航路図と区別したいと思います。航路図というのは、これはおそらく人間が記録を残すようになった歴史と同じぐらい古くからあります。それから、16世紀からヨーロッパ人がアジア各地に向かうようになりますと、さまざまな航路図というものが作られます。これは18世紀末まで基本的にそれほど性格を変えません。ところが、海図という海岸線の非常に精密な情報というものの作成されるようになるのは、私がある程度分かります東南アジアでは、19世紀の初めになります。これはまさにこのころに海の境界という概念、あるいは海のコントロールというものの概念が大きく変わってくるからです。

それまでの国家において、海岸線というものをそれほど意識した国家というものはありませんでした。海岸線というものがそのまま境界になることもありませんし、そもそも海というものに境界をおいて、その海に持ち主をつけるという発想がそのころまで生じるはずもないわけです。ところが、植民地国家はそういった概念を持ってきまして海上に国境線を引き、海をまさに切り分けていきます。ところが、この海岸線のコントロールというものをうまく行うことが、植民地国家は全くできません。これは今日に至るまでそうできて、21世紀に至るまで、国家による海上の国境のコントロールというものは十分にできておりません。今日の報告はこのような話に最終的に結び付けていくのですが、そのコントロールを少しでも実行化するために、意味あるものにするために行われることが、海岸線の調査、それから、灯台の設立、海上コン

トロールの制度の整備といったことになっていきます。つまり、海図というものの成立と植民地国家、あるいは近代化国家の誕生というものは切り離すことができません。

では、どうしてそこまで海岸線を厳密にコントロールしようとする必要があったか。それは海岸線が、まさに海をコントロールする側の国家にとっては、陸地の中でも特に目が届かない、植民地国家の光が届かないところだからです。精密な海図なしにはどこにだれが潜んでいるかということを経営は把握できないわけです。その把握できないことを逆手にとってそういった地域に住む人々が、国家の秩序に反する行為を海上で取る場合に、彼らは「海賊」と呼ばれます。これで海賊がクローズアップされてくるわけです。この海賊をいかにコントロールするかということは、東南アジアに進出した、特に海域東南アジアに進出した近代国家、植民地国家にとっては非常に重要なこととなりました。今日お話ししますように、海賊をいかにコントロールするかということは、彼らの国家の成立前提そのものを決定することにもなり得ました。19世紀にいかに近代国家が海図を作り、海賊の統制を図り、海の境界を実行化していったか、といった研究は最近始まっています。

ところが、そういった研究は、大体19世紀から考察を始めます。19世紀にいきなり国家が海上を管理しようとしたと言うようにです。それは近代的な意味で管理しようとしたという意味ではそうなのですが、それ以前にも当然東南アジアの国家、人々は海を利用しようとしてきたわけです。そのためには、彼らの考える秩序というものがあり、そこには彼らのその秩序を実行化していくためのルールがありました。そういったものが歴史とともに18世紀から19世紀へと変換していきます。これはまさに連続的な展開でありまして、19世紀を扱う研究者が考えるような断絶的な変化ではないというのが私の基本的な考えです。ですので、私はこの18から19世紀という、この世紀の変わり目にこだわって今までもいくつか論文を書いているのですが、その海上コントロールのあり方がどういうふうに変化していくかということも、断絶ではなく連続的・段階的に考えてみたいと思いました。ということで、この地域の海賊の問題が、いかにこの地域に近代国家というものが現れ、海上コントロールという概念が現れることにつながったかを、お話ししたいと思います。そのことはまた、海図がなぜ必要とされたかにもつながってくると思います。

それから、上田先生の蜃気楼国家の話も非常に示唆的だったのですが、まさにこの地域に現れる国家というものは蜃気楼でしかありません。国境も持ちませんし、政府も持ちませんし、中心というものもあつたかどうかよく分からない状態です。では何でそういった国家が現れてきたかと言うと、これは人の動きと物の動きのためと言えます。どういった状況・条件でそういった人の動き、物の動きが起こるのかということを確認することが、蜃気楼国家の、この地域の国家の現れを確認することだと思えます。

そのような視点から、人の動き、物



図1 西部マレー海域

の動きに注目しながらこの海域の政治転換期を考えてみたいというのが今日の話のテーマとなります。と前置きが非常に長くなりましたが、始めたいと思います。

その政治転換期の1780年から1840年ころ、マレー海域(図1)には活発な海賊活動が行われたことについては、さまざまな記録が残されています。言っておきますが、これは記録が増えたことが確実に分かるということで、本当にこの時期に海賊の活動が増加したのかということは、慎重に検討する必要があります。まず、マレー海域という枠組みですが、この報告では、むしろ西部マレー海域と呼べるような、カリマンタン、スマトラ、マレー半島で挟まれる海域であると定義して、話を進めたいと思います。

この時代の海域についていろいろな研究がすでになされていますが、植民地時代から行われていた解釈によれば、世紀転換期に現地政権が衰えることによって海上秩序が崩壊したことが海賊の活発化の原因とされています。これは現在までこの海域の海賊のいわば教科書である、ニコラス・ターリングという人の本でも大体こういった理解がされています。

ところが1960年ごろになりますと、主にフィリピンでありますとか、東南アジア出身の研究者によって、19世紀前後の海賊活動というのは、実は植民地支配の抵抗だったというように、いわば反植民地主義としての海賊としての考え方が提示されてきます。

それに対して、今述べた2つの極端な考え方を強く批判して、海賊研究というものを全く新たな方向に持っていったのがジェームス・フランシス・ワレンという研究者です。この人はアメリカ出身で今はオーストラリアで教えていますが、海賊活動とは、実は経済活動であったと述べます。彼らは奴隷を確保し、あるいは海産物を確保し、ビジネスを行っていたということ強調し、海賊の理解を全く変えてしまいます。その後さらに、海賊は、マレー世界の中の一種の秩序に基づいて行われたことが議論されました。ティモシー・バーナードというアメリカ人の研究者がシアクというスマトラ半島東海岸にある国家を例に、どのように海賊が行われていたのかということ、主に国内の政治的な争いから説明しました。それから、自分の研究になりますが、移民を伴った、あるいは移民を必要とするマレー世界のいわば生態的な秩序というものが、海賊をその内部に含んでいるということを私は2010年の論文で言っております。

このような先行研究を踏まえた上で、今日の報告で取り上げる問題をまず示しておきたいと思えます。ここでは、1780年から1840年という時代に、マレー海域においてなぜ活発な海賊が記録されたのか、あるいは記録が増えたのかを、環境的、歴史的に位置づけて考察してみたいと思えます。具体的には、マレー海域における伝統秩序がどのようなものであり、それが当該時代にどのような経済的状況に置かれていたのか、そして、その中にオランダ東インド会社がどのように参入しようとし、植民地時代に入ってオランダ人の海賊に対する認識がどのように変容したのか、といった視点から考察したいと思えます。

このような問題を考えるにあたりまして、まず海賊の定義ですけれども、ここではこれを、海上における暴力または威嚇によって、相手から金品や人員を強奪しようとする、または相手に何らかの要求を受け入れさせようとする「認識される」行為としたいと思います。ここで強く言っておきたいのは、海賊とは何者かによる認識に基づいて定義されるということです。この時代には、海賊というものを法的に定義する何らかの国家間の合意、法的合意というものは一切存在しません。あくまでだれがどう認識するかということが海賊を決定づけます。

報告は4部の構成から成りまして、最初にマレー世界における海賊行為を説明し、それから、18世紀末からの中国・東南アジアの貿易発展や移民と海賊とを関連づけたしたいと思います。ここ

では特にリアウ、西カリマンタンを例に話してみたいと思います。次いで、そこに入ってきたオランダ東インド会社の活動がどのようなものであったかをお話ししまして、最後に植民地国家の中で海賊がどうなっていくかという話をしたいと思います。

1. マレー世界における海賊行為

—マレー世界—

マレーという言葉、古くはある一帯の地域を指したのではなく、1地点、ある町を指しておりました（図2）。それが漢文文献に出てきます末羅瑜（ムラユ）という町で、おそらくパレンバンと考えられています。これはシュリヴィジャヤの中心でもありました。

ここまではある町だったのですが、先ほどの上田先生の話の鄭和の航海と非常に結びつきますが、1400年ごろパレンバンのパラメスワラ王子がムラカ



図2 マレー世界

に王国を設立するという経緯から、変化が生じます。東南アジアでは国内の争いに敗れた王子がほかの地域に拠点を移すということが非常に多く行われるのですが、まさに彼はそれをやってのけます。この弱小国家は当初は敵に囲まれているのですが、ここに1405年奇跡として現れたのが、まさに鄭和の艦隊だったのです。そこでパラメスワラはこの鄭和の、そして明の保護下に入ることを決定しまして、真っ先にこの鄭和たちと協力し、その保護下に入ることを宣言するわけです。そして、それに続くさまざまな国家も周辺国家も保護下に入ることになりまして、それによって彼らはお互いに抗争することを止める誓いをするわけです。あくまで彼らの盟主は明の国家であって、明の皇帝に背いて互いに抗争しあうことをあつてはならぬ、お互いに平和に貿易を活発化させねばならぬという、その命令に従うことを誓うわけです。このような国家間構造というものをまさにこのマラッカ王国が利用していきます。この構造のことを東アジア・東南アジアでは一般に朝貢システムと言います。

このようにして、平和を確保したマラッカ王国は、このマラッカ海峡の中間点に位置するという地の利を利用して、商業港として発達していきます。そして、この国は非常に早い時期から法律を整備していきます。マレー法、またはウンダン・ウンダン・ムラユと言われるこの一連の法律の多くは、海上での商業活動の規範について述べています。つまり、この国はそういう法を整備することによって、いわばこの海域に商業上のルールを作ることによって、ここに一種の規範国家としての覇権を成立しようとするわけです。その中では、王は港の支配者であり、貿易の保護者であらねばならぬということが言われています。

それから、マレー語が商業上の公用語として使われるようになり、インドネシア諸島一帯で使用されるようになります。このようにマレー世界という地域は、決してマラッカ王国の領域に入ったとか、あるいはその前のシュリヴィジャヤの領域にあったとか、そのような政治的な形態によってできあがった世界ではありません。マレー世界とは、マレー語が用いられ、さら

にこのマレー法の通用する範囲として浮かび上がってきたと考えられます。

—王位継承問題と潜在的海賊—

ところが、このマレー法というのは、実は大きな問題がありまして、それは王位継承の規定がないということです。ある王が亡くなった、あるいは退位したときに、その親戚であればほとんど誰もが王位を主張することができます。15世紀以降のマレー世界の歴史はほとんど王位継承争いの歴史であると言っても、それほど過言ではありません。そして、その争いに敗れた王子、あるいは別におじさんでも従兄弟でも誰でもいいのですが、多くの場合、従者を連れてほかの地に移住します。そういった移民ができる地域というのがまだ海域東南アジアにはたくさんありました。そして移住先で、従者と共に貿易を推進します。

ところがその貿易というのが、必ずしも平和な貿易ではありません。今、その王位継承者と王位継承に敗れた王子と争うとしますと、お互いにライバルの支配下の港における貿易を妨害するために、沖合に船を出しまして、そこを通る商船を強制的に自ら支配する港に立ち寄らせるわけです。これは私の先ほどの定義を用いますと、海賊行為に当たります。けれども、その人物が支配者の地位にある限り、これは完全に正当化されます。仮にこのライバルがこういった行為を行いつつことによって王位を奪還した場合、王朝年代記には、もともと不当にも王の地位を奪っていたある人物を、正当な貿易活動と政治的活動によって排除し、この王子が王位に就いた、といった書き方がされます。

このような経緯は、商業的、政治的抗争としか王朝年代記には書かれていきません。実質的には海賊行為をとまなう抗争が行われているわけですが、彼らにとってはこのような認識となるわけです。

2. 貿易、移民と海賊

—1760-1780年代、マレー海域における貿易の発達—

ここまでマレー世界における海賊の性質を非常に大雑把述べましたが、もう少し今日の報告の時代に限定して、18世紀後半においてどのように貿易が行われていたのかという話をし、その中の海賊の位置づけを考えてみたいと思います。

マレー海域を含む海域東南アジアでは、「商業の時代」という、15世紀半ばから17世紀末までの商業の発展を述べる概念が知られていますが、これは今日のメインテーマを離れますので、説明は省略します。

「商業の時代」は17世紀の末に衰退したと考えられますけれども、1730年代ごろから新たな貿易構造が海域東南アジアに現れます。その要因には、まず中国で18世紀に非常に人口が増えたことが挙げられます。そして経済が発展した都市部では、東南アジア産のスズ、コショウ、海産物、それから森林産物などの需要が拡大します。これはまさにケネス・ポメランツという中国経済史学者が述べているような消費社会の発達と、東南アジア産品の輸入というものが密接に関連していると私は考えております。と言いますのは、例えば、宮廷料理が宮廷を離れて広い階層に拡大していくのもこのころです。それから、外食産業の発達も見られます。いわば、新興階級が、ややぜいたくなもの、それもそれまで手が出なかった皇帝など上流階層に属した文化を、より低位の人々が奪い取ってくるという状況があって、その中で、海外の貴重な商品であるナマコやフカヒレなどの需要が増えたと考えられます。これらはもともと非常に

高級品でしたが、18世紀末になるにつれて、非常に多くのランクのものがさまざまな値段で売られていることが分かります。ということは、上流階級が独占しているのではなく、フカヒレでも低級なもの、より社会的に低い地位の人々によって消費されるようになっていると考えられます。

こういった産品を得るために、中国南岸からはジャンク船がたくさん東南アジアを目指すようになりまし、またインドからはカントリー・トレーダーと呼ばれる私商人が東南アジアに向かいます。彼らの多くはインド系でイギリス系の人はずかだったのですが、イギリスの旗を掲げました。まさに、船の上では様々な背景の人々が混じっており、先程の上田先生の話の通りと言えます。

華南やインドから来るこれらの船は、東南アジアの一定の中継港に向かいました。その中継港まで海産物や森林産物などをそれぞれの生産地から運んでくるのは、ブギス人、マレー人といった海域東南アジアの人々です。彼らがさまざまな産品を集荷し、そして運んでくる過程で彼らが移住を始めます。生産地により近いところ、あるいは中継港の近くに移民をし、そこを拠点として集荷活動をするようになるわけです。

—リアウ・リングの例—

その中でもリアウ、今のシンガポールのすぐ南にある島が、西部マレー海域における東南アジア—中国貿易のセンターとして台頭してきます（**図3**）。リアウには、さまざまな地域から食料品、海産物、森林産物、錫、胡椒などが集まり、その多くは中国に運ばれました。

ここで注目しておきたいのは、このリアウという場所が非常にバタヴィアと競合し合うことです。特にこのパンカ、パレンバン、ジャンビといった地域は、オランダ東インド会社と独占契約を結んでいましたから、本来全ての産品をバタヴィアに送らなければいけないのですが、その土地の人々は王も含めて、利益率が高いリアウに送りたいと考えました。ですから、会社の独占というのはどんどん破れて、物が移動していきます。ということでリアウの発展というのは、同時にバタヴィアの衰退を意味するものともなりました。そうしますと、リアウは繁栄の頂点へと向かうわけですが、これをオランダは黙ってはいられませんでした。

1760年ごろまでリアウでは、現住のマレー人と、そこに移民してきたブギス人たちとの間で抗争が長く続いていましたが、マレー人の有力家系がスルタンを出し、ブギス人有力者からラジャムダと呼ばれた副王を出すという取り決めができて、政治的に安定します。これが貿易の発展につながっていきます。

リアウの発展がオランダ東インド会社貿易システムを妨害するにつれて、1784年、ついに双方の間で戦争が勃発します。当初オランダ東インド会社は非常に不利にあったのですが、そこを通りかかったオランダ海軍の力を借りて、オランダ側がリアウを占領しました。そしてスルタンとの間に屈辱的な条約を結び、スルタンは全てのブギス人を追放することを約束させられます。

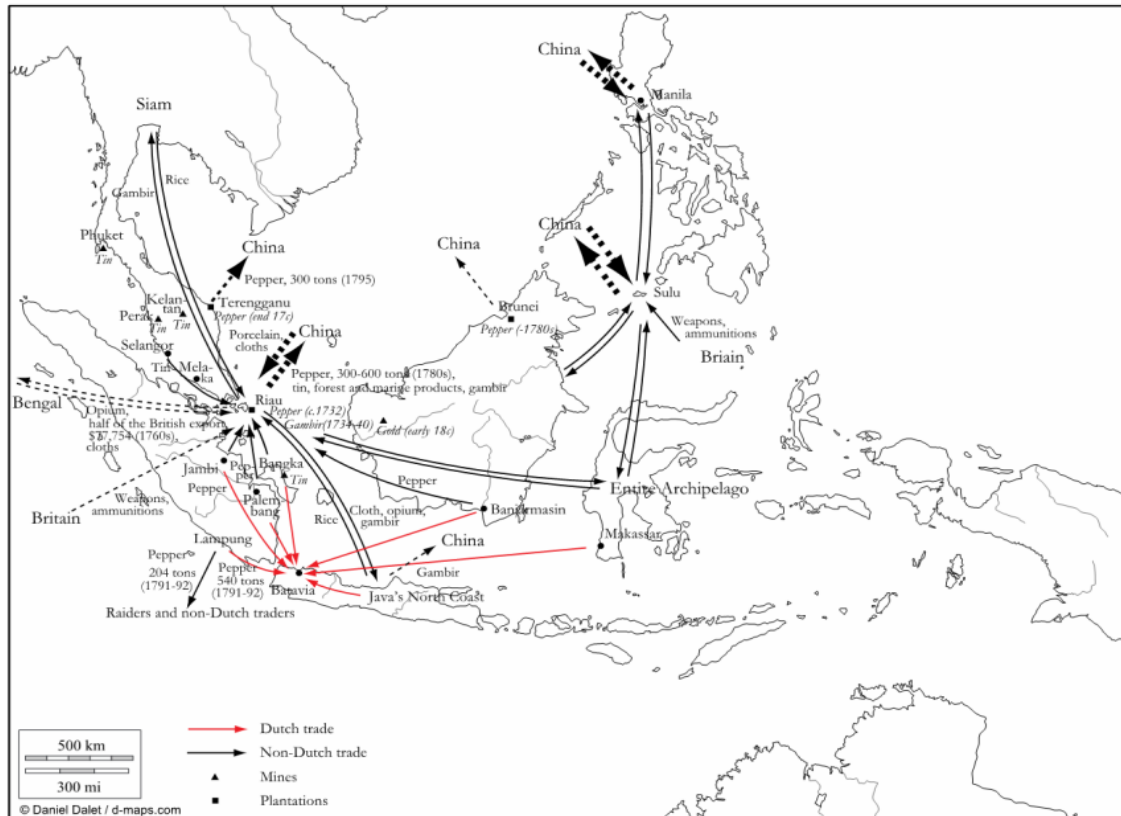


図3 1760-1780年代、リアウを中心とする貿易ネットワーク

1784年のリアウ制圧後、すぐにマレー海域は動乱期に入ります(図4)。3年後の87年、リアウのスルタン・マフムードは、ミンダナオやスルー諸島から来たイラヌン海賊の協力を得て、オランダ東インド会社がリアウに駐屯させていた軍隊を追放することに成功します。ところが、このイラヌン海賊たちは、リアウをオランダ東インド会社から保護する気は全くありませんでしたので、報酬に関する交渉が破綻すると、彼らはすぐにリアウを離れました。そうすると、スルタンほかリアウの有力者たちも、オランダの復讐をおそれてリアウを離れます。その後、いくつかの地を転々として、最終的にリングガに拠点をついたスルタン・マフムードは、

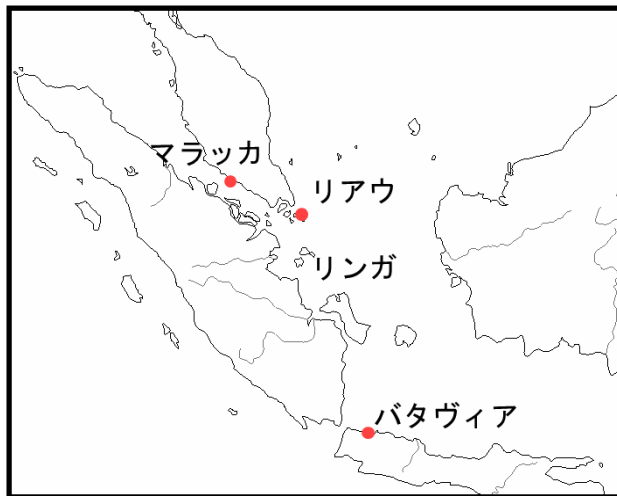


図4 18世紀後半のマラッカ海域

ここに海賊集団を結成いたします。そこには、オラン・ラウト、マレー、イラヌン人など、この地域で貿易活動、それから海賊も含めたさまざまな活動を行った人々が集まりました。そして、あらゆる船、マレー船、それからオランダ船も襲います。あくまでいろんな船、マレー船も含めて襲っていたわけで、オランダに対する復讐など、政治的性格は比較的少なかったと言えます。

こうしたスルタン・マフムードの集団の活動について、リアウの王朝史である *Tuhfat al-Nafis* という本は、「王

は人々に生計の手段を与えていた」と述べています。彼らの活動はまさに海賊で、オランダ東インド会社の資料を見れば、どのように彼らが船を襲っていたかが分かるのですが、これを王朝史ではこのように正当化して書くわけです。

—西カリマンタンの例—

次いで西カリマンタンの例を挙げるのも、先ほどの話と関連します。1760年代、リアウを中心とする中国・東南アジア貿易が活発化している時代に、スカダナという西カリマンタンの当時中心の港町に、リアウ出身のマレー人たちが移民してきて、稲作を開始します。他にも同じころ、スマトラの東海岸のシアクなどマレー海域の各地から多くの移民が西カリマンタンにやって来ます。このような移住はごく当たり前に行われていて、マレー海域というのはやはり1つの海域、1つの世界と言えます。海は人々を隔てているのではなく、海があるから人々は動くのです。カリマタ諸島というスカダナのすぐ沖にある島に移住して定住したグループは、近くを通る船から通行料の徴収を行いました。彼らは先ほどの私の定義に当てますと、まさに海賊行為を行っているわけです。

ところがここにも1784年の動乱、つまりオランダ東インド会社によるリアウの制圧という事件が影響します。ブギス人がリアウから追放されると、リアウのブギス人副王であるラジャ・アリが従者とともにスカダナに移住して来て、ここで貿易を推進したことが、先のリアウ王朝史から分かります。

ところがオランダ人は、「ここに住み着いた海賊ラジャ・アリを制圧する」必要があると彼らの記録に書いています。ブギス人たちの側からすると、彼らの行為は全く貿易活動です。ここでとれた産品を売り、また他から買って持ってくるわけですが、なぜこれが海賊になるかと言うと、彼らがオランダ人たちと争う貿易のライバルになるからです。自分たちが行いたい貿易を阻害するものを、海賊と彼らは書きます。そう書くことによって彼らは、自分たちの側の競争力不足や商業知識の欠如と言った様々な負の要因を相手に転嫁して、自分たちの貿易の不振を会社の上級職員に対して正当化できるわけです。このようにして、オランダは海賊を制圧するという名目の下にスカダナを攻撃して、制圧してしまいます。P.J. ベスという人が書いた本は、150年経った今でもこの地域のこの時代の歴史の教科書として、いまだに参照される研究ですが、この本によると「これによって海岸部は無人的となり海賊だけが住み着いた」とされています。しかし、1820年代に書かれた資料を見るこんなふうには書けないというのが、私の考えです。

スカダナが制圧された後、西カリマンタンには多くの小規模な国家、あるいは国家とも言え



図5 動乱期(1784-)の西カリマンタン

ないような、まさに蜃気楼のような政治体がたくさん出てまいります（図5）。

その一つのポンティアナックは、まさに海賊国家です。もともとスカダナで生まれた人物が、親もとを離れて放浪の旅に出て、南カリマンタンのバンジャルマシで海賊集団を結成して、略奪活動を続けます。彼がその海賊集団のリーダーとして名を上げた後、西カリマンタンに戻ってきて、ポンティアナックに国を作ります。これがポンティアナック王国ですが、この王国を支持して、この王国と一緒にスカダナを攻撃したのがオランダ東インド会社です。ですから、彼らは海賊制圧という名の下にスカダナを攻撃するのに、自分たちが海賊と手を組んだわけです。その後彼らが行う海賊活動に関しても、オランダ人が特に批判することはありませんでした。



図6 ブギス人の兵士

もともとポンティアナックには多くの移民が来て、海産物、森林産物などの貿易を行うようになります。ブギス人は通常は商業活動を行いましたが、有事には王を軍事的に支援する契約を結んでいました（図6）。つまりこのように商業を行っている人々は、同時に軍事集団でもあったわけです。ブギス人は本来スラウェシ島の南部を故地としましたが、1660年代にオランダ東インド会社との戦争に敗れた後、17世紀末から18世紀にかけて海域東南アジア各地に移民します。そして、各地で商業活動を行った他、海上における戦闘の技術や知識によって各地で重宝され、移民集団として現地の国家と時には協力し、時には敵対するようになります。

他にも、港町を中心とする小国家が現れました。クブという場所ももともとポンティアナック王の甥が開いた港でしたが、やがて独立します。ここにも移民がやって来て、

1820年代の資料によると、シンガポールや中国との貿易を行っていますが、彼らは同時にこの国の支配者が組織した海賊集団の中で略奪行為を行っています。シンパンにはマレー人、華人が移住して、海産物、森林産物を輸出しました。クダワンガンには当初はマレー人が住み着きましたが、後にイラヌン人の海賊が移住しています。シンパンでは主に華人が商業を行いましたが、彼らの扱っている重要な品物の一つが奴隷でした。奴隷は海賊によって集められる商品であり、シンパン在住の華人は商人と記録されていますが、海賊とは無縁ではない存在でした。

図7はイラヌン人の海賊と彼らの船です。大砲も備えていて、海域東南アジアでは非常に恐れられた船です。彼らが奴隷を必要とした理由は主に、ここに描かれているような船の漕ぎ手に使うためでした。彼らの船はこの漕ぎ手によって、オランダ船をはじめどの船よりも速く進むことが出来ました。多い場合は1隻で100人使い、25人の漕ぎ手を1列に並べて、上下2列、両方サイドに配置しました。それ以外に大砲を2門、3門と備えていて、ヨーロッパ船も太刀打ちできませんでした。

さらに他の小国家も挙げておきます。クタパンは本来非常に人口が少なかったところですが、ある王の首相が命令してここに町が開かれると、マレー海域一帯に住んでいるさまざまな人々が移住してきて、やがて国家となりました。これらの人々は海ガメ、ナマコなどを獲り、これらは中国向けの商品となりました。カリマタ諸島にも、ボルネオ島とミンダナオ島の間にある

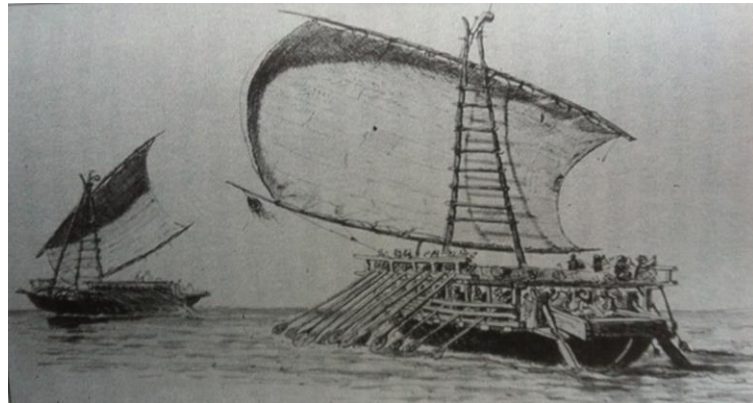


図7 イラヌン人の海賊と船

スールー諸島から、スールー王国のスルタンの甥がやって来ましたが、彼らは海賊と記録されています。しかし同時にオランダ語資料は、彼らがナマコを獲っていたことも記しています。われわれがパイレーツ・オブ・カリビアンを言うときに彼らがナマコを獲っているとはなかなか想像しないですが、オランダ人は海賊と書きながら、実は彼らが漁業や商業活動をやっていることも認めているわけです。カリマタ諸島には他にシアク人の集団も来ましたが、彼らはまさに海上軍事集団で、あるときはポンティアナックの戦争に従軍していますが、1819年オランダのパレンバン攻撃のときには、オランダ側に援軍しています。彼らにとって、その軍力を提供する相手がマレー人であるか、現地人であるか、オランダ人であるかといったことは全く関係ありませんでした。

3. マレー世界にとってのオランダ東インド会社の活動

このようなマレー海域にオランダ東インド会社がどのように進出してきたかということを考えるにあたって、ランブンという地域を例に出したいと思います(図8)。ランブンはスマトラ最南端の地域で、東南アジア最大の胡椒生産地でした。1684年にオランダは、ランブンを支配したバンテン王国のスルタンと結んだ条約によってランブン胡椒の独占権を得ましたが、実

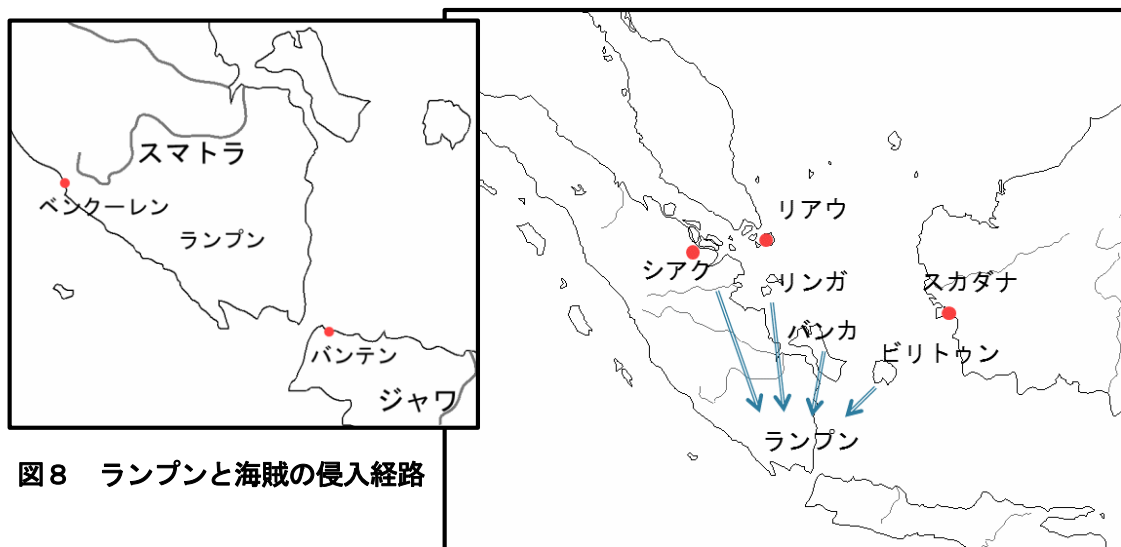


図8 ランブンと海賊の侵入経路

際にはベンクーレンのイギリス人などがランブンまで入ってきていまして、オランダ人の独占というものはなかなか成功しませんでした。さらに 1780 年代末からは、「海賊」、「密輸商人」とオランダ人が記録するグループが増えるようになります。これらはおそらく、オランダの制圧によってリアウを追われたグループが、胡椒の産地と運搬船を襲撃するようになったためと私は考えています。

ところがこの海賊と言われている人々は、実際には襲撃するだけではなく、産地に行って、オランダと契約しているバンテンの商人よりも高く胡椒を買ったりしています。つまり「海賊」と言われている人が商売をやっていると記録されているのです。これは恐らく、海賊が商人と競争していて状況によっては胡椒を買ったということも言えますし、あるいはその記録そのものが海賊と密輸商人というものを充分区別できていない、あるいは彼ら自身が、ある条件の場合には海賊を行い、購入した方が継続的に産品を買えると判断したときには商取引を行うというように、その場に応じて異なる行動を取っていたのではないかと考えられます。オランダ東インド会社文書には、1790 年代の一定期間だけ、海賊による被害が量的に示された資料があります。それによると、海賊に奪われた胡椒は、オランダ人が確保した量の 38 パーセントに上りました。

4. 植民地国家と海賊

ところが植民地時代になりますと、海賊との関係-今までは協力することもあり、ある時は商業上のライバルであった海賊との関係-が、性質を変えてきます。1819 年、オランダ政庁が西カリマンタンで植民地支配を始めるにあたって、「ボルネオ領有の目的」という、3 項目から成る文書

資料 1 オランダ政庁「ボルネオ領有の目的」

- 支配者がオランダの保護を求める土地に、オランダ国旗を掲げる。
- 貿易を促進するために海賊を鎮圧し、海賊と殺人集団が弱き民を苦しめているこの地に、平和と秩序をもたらす。
- 人々に、重すぎない負担を課す。

を作成します（資料 1）。非常に興味深いことに、その 1 項目が海賊について触れています。そこには、自由貿易という概念が強く働いているように見えます。貿易を自由に行うことは我々の利益であるけれども、同時に現地社会のためにもなるのだという、その地に進出する正当化の理論として、自由貿易の概念が使われています。

そして、この自由貿易と相反するものとして、海賊が挙げられています。そして海賊が苦しめているのは、オランダ人の「我々」ではなくなります。この時に東インド会社ではなく、植民地政府として入っていくとしていたオランダ人は、地域の弱い人々が苦しめられているから我々が入っていく正当性がある、そして我々は平和と秩序をもたらす力があると主張しています。このような、いわば文明化の使命が、植民地支配の正当化の理由になっていくわけです。

ここでオランダ人の海賊に対する認識が大きく変わったことを強調しておきたいと思います。今までのように単に商業上のライバルではなく、彼らがそこに支配を行うための障害として、いわば植民地化を正当化する理論として、海賊がクローズアップされています。これによって海賊を記録し、その被害を強調することに意義が出てきます。こうして海賊が万民の敵として認識されるようになるのです。

ところがそういった海賊や海賊集団のリーダーを、完全に排除するような行政的能力を当時

の植民地政府は持っていません。そこでオランダ植民地政府は 1827 年、カリマタ諸島の移民グループの 1 つであるシアク人集団のリーダーであるラジャ・アキルを、スカダナのスルタンに任命します。当時はまだ直接支配が確立しておらず、各地のスルタンと条約を結んで、そのスルタンがオランダ政府に忠誠を誓う代わりに、政府は彼に行政権を与えていました。このように政府は、オランダ側に協力しようとする元海賊—当時のオランダ人がそのように認識していることは資料に明確に示されています—が、海賊の統制のために有用と考えました。なぜなら、彼らは地方社会で人望があり、かつオランダに協力的であり、さらに地方社会について良く知っているからです。この地域に駐在することになったオランダ人官僚たちは、こういった地方権力者がまだ地域で非常に影響力を持っているということを認識していました。こういった有力者を除いて、植民地政府はまだ自分たちの命令を地域社会に届けることはできないわけです。政府の中核では植民地海賊の排除が支配正当化の理由とされていたにもかかわらず、現地に駐在した官僚は、海賊を海賊統制に使わざるを得ないという現実を認識していたのです。

このようなオランダの例と同様のことは、イギリス支配地でも行われていました。イギリス植民地政府は、自由貿易のルールと文明化の使命をオランダ以上に強調していましたが、シンガポールのイギリス人総督は、その地域で海賊と呼ばれていたトゥメンゴン・ダイン・イブラヒムという人物と協力します。トゥメンゴンというのは、その地域の地域有力者の家系を指す称号ですが、彼の保護を求める小首長たちをその監視下に置いてシンガポール周辺に移住させることを、総督は認めました。実際にはイブラヒムはそうした小首長による海賊活動を支援していたのですが、彼の影響力を考慮して、植民地政府は彼を排除することがなかなかできませんでした。最終的には 1840 年にこの一族をシンガポールの対岸のジョホールに移封して、何とかシンガポールから影響を除こうとします。後にはこの人物をジョホールのスルタンにも任命して、彼の権威を認める代わりに、何とかシンガポールから離れたところに拠点を持たせようとするわけです。実際には偶然、ジョホールでグッタペルチャという海底ケーブルのコーティング剤の原料が見つかり、それから大きな利益をあげられるということが分かったため、トゥメンゴン一族は海賊ではなくグッタペルチャの採取に力を入れるようになります。

まとめ

最後にまとめたいと思います。18-19 世紀のマレー海域の海賊活動は、マレー世界においては、政争の敗者が取る習慣であり、正当な貿易活動であり、また正当な政治的な活動でもありました。この時期にはまた、中国と東南アジアの貿易が活発化し、中国で東南アジア産物の需要が増加するという状況がありました。そのような状況の中で、さらに貿易を進めていくために、さまざまな海上商業軍事勢力が各地に移住しました。彼らはしばしば軍事勢力としてその軍事力を移住先の支配者に提供しました。そういった活動は実際に海賊としての側面を多く持ちましたが、彼らのことを海賊と記述したのは、ほとんどオランダ人でした。オランダ人は実際にはこういった勢力と協力して彼らの軍事勢力を利用する点では現地の支配者と変らない行動を取っていましたが、自分たちの商業的特権が守られない場合には、そういった海上商業軍事勢力のことを海賊と頻繁に記述したわけです。

植民地体制下になりますと、今言った通り、自由貿易が強調され、さらに植民地支配の正当化のために万民の敵として海賊が描かれるようになります。ところが海賊の中には、政府に協力して生き残るグループもいました。このようにして生き残った海賊たちも、その後さらに植

民地政府の行政制度が整備されるにつれ、だんだんにその勢力を削がれていきます。

だからと言って今日に至るまで、海賊という存在はなくなっておりません。その理由には、複雑な海岸線に政府が十分な行政拠点を置くことのできないために、海上警備が非常に困難であることが挙げられます。それから、富が偏在していることも大きな要因です。多額の貿易品を積んだ船が、非常に貧しい地域のすぐ沖合を通過していくわけです。そのような富の偏在がある限り、その富を暴力的に奪おうとする集団が、貧しい漁民たちを組織して略奪や誘拐をするという行為は、なかなかなくなりません。さらにそういった不法活動を行う集団が、地域の警察を巻き込んでいます。ですので、警察による警備も十分効果を持ち得ず、不法活動はいまだに続いているわけです。以上です。どうもありがとうございました。

大橋：どうもありがとうございました。

参考文献

太田淳「近代のネガ、または取り込まれた異者：19世紀マレー海域の海賊」

『現代思想』39-10（2011年7月）号、pp. 91-105.

太田淳「貿易と暴力 -マレー海域の海賊とオランダ人、1780-1820年-」

羽田正編『東インド会社とアジアの海賊』（勉誠出版、近日刊）